

西南学院初代院長條猪之彦の事蹟

安部 健一

1. はじめに

西南学院の初代院長條猪之彦（1881〈明治14〉－1927〈昭和2〉）先生（以下敬称略）については、その在籍期間がわずか数か月と短かったことに加え、40代という若さで亡くなられたこともあり、その詳しい事蹟についてはあまり知られていない。

1986年4月に発行された『西南学院七十年史』には、「初代院長が選ばれるまで」（上巻、266～270頁）と題し、條の略歴をはじめ、條を学院に推薦した齊藤惣一（後述）のことなどが詳しく述べられていたが、2019年3月に発行された『西南学院百年史』では、『七十年史』の内容をかなり圧縮する必要があると言え、そういった内容が大幅に削除され、単に條が「熊本の玉名中学校の教諭であった」ということだけが述べられているに過ぎず、條が具体的にどのような人物だったのか、何故、西南学院に赴任することになったのかについては、一切触れられていない。（『西南学院百年史』通史編総論第2章第1節「西南学院の創立」47頁）

しかし、学院が創立100年を迎える中で、その『百年史』に象徴的であるように、「初代院長」について詳しいことが分からない、あるいはしだいに忘れ去られていくというのは、やはり残念である。また、「初代院長」について知ることは、創立前後の学院の状況について、いっそう深く理解することにつながるのではないか。さらに、歴代の院長は、現在の今井院長まで含めて17人存在するが、おそらくその中で條だけが、その生涯について知られていないことが多いのではないか。條の生涯とはどのようなものだったのだろうか。それを何らかの形で残すことはできないだろうか。

そう考えた筆者はまず、学院史資料センターの高松千博氏（当時）に連絡を取り、学院が所蔵する條猪之彦関係の資料の確認作業から探索を始めることにした。高松氏から頂戴した資料は

- ①條猪之彦の略年表（以下「略年表」：『西南学院七十年史』編集の際に作成されたもの）¹

1 「略年表」はおそらく院長就任の際に提出された履歴書などをもとにして作成されたのであろう。

- ②京都バプテスト教会（同盟系。連盟系の「日本バプテスト京都教会」とは別の教会原簿（條の受洗記録が書かれたもの）²
- ③受洗が行われた「疎水運河」の写真付紹介文（古書からの引用？）
- ④『日本バプテスト連盟史（一八八九～一九五九年）』（日本バプテスト連盟、1959年発行）

などであった。さっそく「略年表」を頼りに條の人生をたどってみることにする。

2. 故郷と家系について

「略年表」によれば、條は、1881（明治14）年4月23日、「熊本県下益城郡杉村大字杉島一五三〇番地」（傍線筆者、後述）で生まれたとある。調べてみると、そこはその後の町村合併を経て、現在は「熊本市南区富合町御船手」という地名おひなてに変わっていた。何かしら手がかりとなるものがつかめるかもしれないと思い、休暇を利用して訪ねてみた。

そこは熊本市南部を流れる加瀬川と緑川の中州（杉島）の北東部に位置し、北側から西側にかけては加瀬川、南側は田園地帯、東側はJR鹿兒島本線と九州新幹線などに囲まれた一角にあるが、その集落は周囲から孤立したような印象を受ける³。

後から考えると幸運と言うほかはないが、杉島地区にある寺院「南望山観音寺」の

2 識者にとっては不要であるが、筆者の心覚えもかねて『日本バプテスト連盟史（一八八九～一九五九年）』（日本バプテスト連盟、1959年発行）および『西南学院七十年史』などを参考にして「同盟」と「連盟」について簡単に確認しておきたい。

英国で誕生したキリスト教（新教）バプテスト派のうち、米国において成立したものが2つに分裂して生まれたのが「南部バプテスト連盟」（1845年成立）と「北部バプテスト連盟」（1907年成立。後に「米国バプテスト連盟」と改称）である。日本への伝道の開始は「北部」が早く、1873（明治6）年、「南部」は1889（明治22）年のことであった。その後、日本における南北合同の機運が高まったのであろうが、1901（明治34）年、「日本全体のバプテスト教会（日本浸礼教会）」（『西南学院七十年史』）の第1回総会が東京で開催され、その後「南部」は「西南部会」、次いで「西部組合」として、「北部」は同「東部組合」として、時に対立しながらも協力関係を維持しつつ発展していくことになる。両組合は第二次世界大戦前後の国策に沿った合併（「日本バプテスト基督教会」（1940）次いで「日本基督教団第四部会」（1941））の時期を経て、1947（昭和22）年、「日本基督教団」を離脱した「南部（西部）」系の教会によって結成されたのが「日本バプテスト連盟」であり、遅れて1958（昭和33）年、「日本基督教団」を離脱した「北部（東部）」系の教会によって結成されたのが「日本バプテスト同盟」である。「西南学院」は言うまでもなく、「日本バプテスト連盟」と関係の深い学校である。

3 後述するようにそこは「御船手組」によって形成された集落であり、そのために周囲とは隔絶したような印象を持ったのかもしれない。

住職高見恒健（健治）氏、さらには、土地の歴史に詳しい吉村圭四郎氏（株式会社「瑞鷹」代表取締役副会長）から詳しいお話をお聞きすることができた⁴。

お二人のお話を総合すれば「御船手」とは、細川藩の参勤交代の際の水運などに従事した藩士のことで、水軍としての役割も持ち、そのような人々（「御船手組」）によって形成された集落の名前として現代の地名に受け継がれているということであった。この「御船手」の集落から加瀬川を挟んだ対岸が、細川藩の水運の拠点、年貢米を中心とした物資の集散地として知られる「川尻」の宿場である。川尻は軍港としての機能も持っており、周辺一帯を合わせると「常時、百艘ほどの藩船が配置されていた」（『ふるさとの歴史 川尻』川尻文化の会、2015）そうである。つまり、條家はそのような細川藩士「御船手組」の一族ということであった⁵。

驚いたことに観音寺には、「杵島北部戸籍簿」というものが残されており、それによると條の住所も「熊本県下益城郡杉合村字杉島村 1530 番地」と書かれており、学院の「略年表」の記述とは若干異なっているが、生年月日などは「略年表」どおりである⁶。

また、当然そこには家族の名前も書かれており、それによると、祖父は東吾、祖母はエイ、父は東平、母はミ子^おであり、4歳年上の姉ハツと4歳年下の妹ツ子^おの3人きょうだいであった⁷。

また、観音寺には、「明治二〇年六月字北崎検圖帳」というものも残されており、それによると條家は、屋敷がある一反二畝六歩（366坪）のほか、併せて一反一畝二三歩

4 観音寺にはいくつかの貴重な資料が残されており、その資料を示しながら熱心に語られる高見氏のお話は非常に興味深いものであった。本稿で示した條の故郷に関する内容は、基本的に高見氏の努力によって明らかになったものである。

また、吉村氏からは、特に「御船手組」についての詳しいお話をお伺いすることができ、高見氏からお伺いした内容と併せて、大いに参考になった。細川藩の参勤交代の際には、物資は「御船手組」の人々による海上輸送によって、一旦、「大里」（現北九州市門司区）や「鶴崎」（現大分市鶴崎、細川藩領）の港に運ばれ、そこで大きな船に移し替えて大阪、あるいは江戸に運ばれていたようである。

5 條の祖父「東吾」の名前はウェブサイト「肥後細川藩拾遺」の中の「有禄士族基本帳」（明治7年）でも確認することができる。

余談になるが、杉島を通る県道50号線は、旧国道3号線であり、鹿児島方面から熊本城下へ至る主要な街道である。西南戦争の際にも西郷軍の進軍経路となり、対岸の「川尻」の宿には熊本城攻撃の際の本営や野戦病院が置かれ、この一帯は激しい戦闘の舞台となったところである。想像をたくましくすれば、旧「御船手組」の一員であった條の父「東吾」も何らかの形で西南戦争に参加していたのかもしれない。

6 住所については「戸籍簿」である以上、こちらの記述が正確であると考えられる。高見氏の話によれば、村の合併に伴う新戸籍簿作成の際に処分されたものが、地元の寺院である観音寺に収められたということである。

7 家族についてはその没年をはじめ詳しいことについては今のところ不明である。

(353坪)の土地を2か所に分けて所有していたようである。

現在では條家そのものが絶えており、土地の所有関係については不明であるが、條家があった辺りは、九州新幹線の工事と加瀬川の河川改修の結果、新幹線橋脚部の空地と堤防とになっている。また、一族の墓地も当時の堤防の北側にあったようだが、同じく河川改修の際に改葬され、その際に無縁墓地として合葬処理されたということであった。



細川藩の軍港「御船手渡し場」跡 (画像提供:『ふるさとの歴史 川尻』)

3. 学生時代

(1) 小学校・高等小学校

「略年表」には小学校などの記載はなく、正確なことは確認できないが、高見氏のお話では、明治20年前後の当時の学制などから考えると「杉合東部尋常小学校」(4年制)から「^{あきた}鮑田南部高等小学校」(2年制)へ進んだうえで、旧制中学へ進学したのではないかということであった。ただ、詳しい資料は一切残されていないので、実際の就学年齢や卒業年などについても不明である⁸。

8 これらの学校はその後の複数回にわたる統合を経て、現在は、「富合小学校」と「富合中学校」とになっている。「富合小学校」の教頭、木村氏のお話によれば、古い資料は残っていないとのことであった。

(2) 中学校

「略年表」によれば、「熊本県立熊本中学校」（傍線筆者、現熊本高等学校）を1901（明治34）年に20歳で卒業したことになる。

同校は、1900（明治33）年、「熊本県中学^{せいせいこう}済々黌」が生徒増のために「第一済々黌」と「第二済々黌」に分割されたうちの「第二済々黌」として発足したもので、同年12月に「熊本県熊本中学校」と改称、さらに翌1901（明治34）年6月に「熊本県立熊本中学校」と改称されている。いわゆる「済々黌」が「熊本県中学済々黌」を名乗るのは1899（明治32）年のことであり、その前の5年間は「熊本県尋常中学校」と称していた。ということは、條が入学したのは「熊本県尋常中学校」であるが、「熊本県中学済々黌」および「第二済々黌」の時期を経て、卒業は「熊本県立熊本中学校」（第1回）ということになるのである⁹。

何か当時の資料が残されていないか、同校の同窓会組織「江原会」に問い合わせたところ、同事務局から送られてきたのが、條が同校発行の雑誌『江原』創立十周年記念号に寄稿した「祝辞」と題する一文であった。貴重なものなので全文引用する。なお、旧字、旧仮名遣いなどは固有名詞を含めて現代のものに改め、さらに句読点なども適宜追加した。

祝辞

第一回卒業生総代 條 猪之彦

明治四十三年十月三十日我が母校に於て創立第十周年の記念式を挙行せらるるを聞く、誠に歡喜にたえざるなり。顧みれば十有幾年の昔、余等の母校に学ぶや母校は未だ熊本中学校と称せずして、藪の内にありて済々黌と称しき。其の分れて第一済々黌第二済々黌となるや、我等は第二済々黌に属して藪の内にのこり、第一済々黌はいまの済々黌の前身となれり。間もなく第二済々黌は熊本中学校と改称して実に我が母校の基礎をなせるなり。当時余等は五年級の賊鬼大将にてありき。藪の内の寄宿舎にありて天下を睥視したる當時を思えば、転た感慨に堪えざるなり。其の後母校を卒業して既に十年を経たるが帰省すれば今も尚お必ず先ず母校に至りて校長閣下並に諸先生を訪い過去を語り将来を談じて以て無上の楽しみとはすなり。思うに創立十年と称する中学校は尚お他に少なからざるべし。而

9 「済々黌」は、もともと「私立学校」として創立されており、1901（明治34）年12月、「県立学校」に移管された際に「第一済々黌」は「熊本県中学済々黌」、「第二済々黌」は「熊本県立熊本中学校」と改称される。條が卒業した1901（明治34）年3月当時は「熊本県立熊本中学校」であるが、卒業後の6月に「熊本県立熊本中学校」と改称される。なお、後に載せた「祝辞」の記述から推測すれば、中学への入学は、1897（明治30）年（16歳）ということになる。

かも其の卒業生が母校に至りてアットホームに感ずるものそれ幾何かある。余等のかく母校をしたう念あるは故あって存するなり。古き学校の建物を恋うにもあらざるなり。校長閣下は創立以来の校長にして諸先生の大半も亦創立以来の先生なり。而して今も尚お温顔を以て余等に接し余等の将来に対しては我が子のその如く心をいため給う。かくて余等の母校に至るや実に家庭に帰れるの思いあるが故なり。余かつて菊池総長のケムブリッジ大学に於ける学生生活の話の聞ける事あり。ケムブリッジ大学を出でたるものは皆母校大学に至ればアットホームに感ずるとの事なり。我が母校を以てケムブリッジ大学に比する、もとより其の事情の異なるものあらんも此の点に於てはなほだ相似たるを思うなり。是れ必ずしも余が我田引水には非ざる也。英人がケムブリッジ大学に学べるを誉とする如く余は我が熊本中学校に学べるを誉とするものなり。今我が校に記念式を挙行せられ並びに記念運動会の催しあるを聞き、身は遠地にありて親しく此の盛典に列するの栄を得ずと雖も遙かに其の有様を偲べば諸先生の風貌目前に彷彿し、余等が薮の内時代の事をも追想して現に在学の諸兄も亦余等がなせし如く活発に無邪気に諸先生の温かきご指導のもとに跳び且つはねて面白き日を暮らし居らるるをおもうなり。余は確信す、我が校に学べる諸兄は幸なりと。希わくは諸先生並びに諸兄健在なれ。聊か所感を述べて祝詞に代う¹⁰。

この文章が書かれた当時、條は後述するように「秋田県立本荘中学校」の教師をしており、條の理想とする学校や教師の在り方がうかがえる興味深い一文と言える。また、事務局によれば、「卒業生総代」とは、首席で卒業したことを意味するということがあった。また、文中「薮の内の寄宿舎にありて」という表現から、條は中学から寄宿舎生活を送っていたことが分かる。当時の寄宿舎は学校の敷地内に建てられていた。今なら車で30分程度の道のりであるが、当時の交通の便を考えると、やはり寄宿舎に頼らざるを得なかったのであろう。

(3) 高等学校

熊本中学を卒業した條は、1901（明治34）年、地元熊本の「第五高等学校」（五高、現在の熊本大学）に進学する。当時の五高は無試験で帝国大学に進学する「大学予科（第一部法科、文科、工科・第二部理科、農科・第三部医科）」と「工学部」（後に「熊

10 文中「薮の内」は現在の熊本市中央区城東町、上通町一帯の地名。また「菊池総長」とは東京帝国大学総長、学習院長、京都帝国大学総長などを歴任した「菊池大麓」のこと。文章執筆当時は京都帝国大学総長。

本高等工業学校」として独立の後、現熊本大学工学部となる）から成り立っており、
條は「第二部理科」に入学した¹¹。

何か当時の資料はないか、五高の歴史資料を保存展示する「熊本大学・五高記念館」
に問い合わせたところ、研究員の藤本秀子氏から紹介されたのが、五高の校友会（「龍
南会」）が発行していた『龍南会雑誌』の存在であった。『龍南会雑誌』は熊本大学図
書館によってデジタル化されており、パソコンで閲覧可能である。もしかすると條も
何か文章を残しているかもしれないと思い、数年分（第84号から第107号）を確認し
てみたが、残念ながらそれらしきものは見つからなかった。

しかし、第107号の「雑報」の中に1904（明治37）年の「卒業証書授与式」の記事
が掲載されており、その中の「第二部理科」の名簿に「條猪之彦」の名前も載せられ
ていた。この時の卒業生の数は、法科が72人と圧倒的に多く、次いで医科の37人、
工科の36人、文科の22人、農科の10人と続き、理科は最も少ない8人であった。

名簿には卒業生の進学先も記されており、それによれば條は「東京帝国大学」と
なっている。筆者は目を疑った。「略年表」の記載はもちろん、学院史の中で、條が「京
都帝国大学」の出身であることはいわば「常識」である。これは一体どういうことであ
ろうか。そもそもその大学の卒業も「1910（明治43）年」となっており、五高の卒
業から6年後のことである。当時の大学は3年制であり、6年は長すぎる。その間に
いったい何があったのか。とにかく、まずは東京帝国大学への進学の有無を確かめな
ければならない。そこで筆者は東京大学の理学図書館に連絡し、当時の資料が残って
いないかどうか問い合わせることにした。

すると同図書館からすぐに連絡があり、ウェブサイト「国立国会図書館デジタルコ
レクション」の中の『東京帝国大学一覧』および『京都帝国大学一覧』の存在をご教
示いただいた。また、同時に條猪之彦の名前が掲載されている箇所もご教示くださり、
それによって條の大学進学についての「新事実」を含んだ概略を理解することができ
たのは実にありがたいことであった。

(4) 大学①東京帝国大学理科大学

『東京帝国大学一覧』（明治37年～38年）によれば、條が最初に進学したのは『龍
南会雑誌』の記載の通り、「東京帝国大学理科大学（現東京大学理学部）」であった。
1904（明治37）年、23歳の時である。しかも條が所属したのは、後に京都帝大で専門

11 後述の「卒業証書授与式」の記事から言えば、五高生の進学先は、東京帝国大学、
京都帝国大学および同福岡医科大学（後の九州帝国大学医学部）の3校だけであった
ようだ。

とする「化学科」ではなく、「物理学科」であった。ちなみに五高の理科を卒業した8人のうち、「京都帝国大学理工科大学（現京都大学理学部、工学部）」の「理学科」に進んだ1人を除き、7人が「東京帝国大学理工科大学」に進み、そのうち條を含む4人が物理学科、残りの3人が地質学科への進学であった。

同一覧によれば、明治37年に物理学科の1年に在籍していたのは14人であるが、條を含めてその後、彼らがどうなったかを見てみたい。なお、当時の物理学科は2年次から「理論物理学科」と「実験物理学科」とに分かれていたようである。翌明治38年度の同一覧（明治38年～39年）が欠本のため、明治39年度の同一覧（明治39年～40年）を確認したところ、37年入学生14人は順調に行けば3年次に進級しているはずであるが、名前が確認できる者（在籍者？）が10人、そのうち3年次に進級していた者は、理論物理学科に2人、実験物理学科も2人のわずかに4人であった。この4人は翌明治40年には無事に大学を卒業している¹²。

條と同級の五高出身者4人については、いずれも落第を経験しており、理論物理学科2年に2人、実験物理学科2年に1人、1年原級が1人、そしてその1年原級の1人が條であった。当時の東京帝大の進級の難しさがうかがわれる数字と言えるが、それにしても條に何があったのか。今となっては何も資料が残されていないので、詳しいことは分からないが、その翌年の1907（明治40）年、條は東大を退学し、「京都帝国大学理工科大学」に入学する。既に26歳である。

（5）大学②京都帝国大学理工科大学

『京都帝国大学一覧』（明治40年～41年）を確認すると、「理工科大学」の「理学科」の「40年入学」者14人の中に「條猪之彦」の名前も見える。「理学科」は、1904（明治37）年、それまでの数学科、物理学科、純正化学科の3学科が統合されて誕生した学科であるが、條の入学の翌年の1908（明治41）年、再び分離してもとの3学科に戻る。條が2年次以降、所属したのは「略年表」に記されていたとおり「純正化学科」であった。同期入学の14人のうち、「純正化学科」に進んだ者は6人、さらにそのうち順調に3年間で卒業した者は4人、條はその中の一人であった¹³。

東京帝大では進級することなく退学した條であったが、京都帝大では順調に3年間

12 條と同じ物理学科の同級生で、順調に3年間で卒業した2人のうちの1人が、後に東洋音楽の研究で文化功労者（1981年）となった田邊尚雄（1883-1984）である。

13 條と同年に純正化学科を卒業した他の3人のうち、特待生となった堀場信吉（1886-1968）は、その後京都帝国大学教授、東京工業大学教授、同志社大学教授等を歴任し、文化功労者（1966年）となる。また、同じく小林松助（生没年未詳）は、東北帝国大学教授や日本化学会会長を務めた。

で卒業することができたわけである。学科全体の進級の状況から考えても、京都帝大の進級が容易だったとは考えられない。とすると、東京帝大での原級の原因は、やはり学力以外の問題であったのだろうと思われる。東京帝大の「物理学科」から京都帝大では「純正化学科」へ専門を変更したことから考えると、あるいは専門学科についての疑問などもあったのかもしれない。條が受洗するのが、京都時代であることなども併せて考えると、何らかの健康上の問題、あるいは精神的な問題などがあったのかもしれない。

いずれにしても、條は京都での学生生活を3年で終了する。なお、後述する條の学術論文の中に指導教官として名前が出てくることから考えると、京大では、おそらく大幸勇吉おおさかの指導を受けたと思われる¹⁴。

(6) 大学③受洗と京都バプテスト教会

最初に掲げた「京都バプテスト教会」の教会原簿によれば、條が受洗して信仰の道に入ったのは1909（明治42）年2月14日、京都帝大在学中の28歳の時であった。

現在の「京都バプテスト教会」の牧師は、『西南学院百年史』編集の業務にかかわった西南学院100周年事業推進室におられた松岡正樹師である。條の受洗の記録も松岡師が学院に送ってくださったものである。松岡師のお話によれば、「京都バプテスト教会」は1901（明治34）年の創立（伝道開始は1897年）、現在の教会は、河原町丸太町の交差点から北に100メートルほど上ったところから西に入った路地に建てられているが、以前は丸太町通りと御池通りの間の河原町通りに面したいくつかの町屋を転々としていたという。條が通っていたのもそういう時期の教会だったことになる。記録によれば、授洗者は宣教師のG.W.ヒール、受洗の場所は「琵琶湖疎水」（琵琶湖と京都を結ぶ水路）であったというが、松岡師によれば、当時左京区の岡崎付近にバプテストの宣教師館があり、おそらくその近くの「琵琶湖疎水」で授洗が行われたのであろうということであった。受洗の動機や教会での活動等についても、それ以外の資料がまったくないので詳しいことは一切分からない。（傍線筆者）

ただ、当時のキリスト教の拡大、あるいはそれに伴う学生YMCA（基督教青年会）活動の活発化などが、條を含む当時の学生たちに与えた影響も看過できないのかもしれない。YMCAに関して言えば、1880年代以降、毎年のように全国の主要都市をはじめ、各地の大学や高校にYMCAが結成され、多くの学生たちが活動に参加してい

14 大幸勇吉（1867-1950）は石川県出身、東京帝国大学理科大学化学科卒。第五高等学校、東京女子高等師範学校、京都帝国大学理工科大学各教授を歴任。1932（昭和7）年帝国学士院会員。理学博士。

る。東京帝大と一高（現東京大学）でYMCAが組織されたのが1888（明治21）年のこと。三高（現京都大学）では1889（明治22）年に「基督教青年同盟会」が結成され、1897（明治30）年に創立された京都帝大でも、その2年後の1899（明治32）年に、後に「地塩会」と命名される「京都大学青年会」が結成されている。條の母校である五高でもYMCAの組織「花陵会」が結成されたのが1896（明治29）年のことであった。條もYMCAとの関係があったのではないかと考えられるが、現在のところ、それは確認できていない。

それにしても、日本におけるYMCAの歩みをたどってみると、日本におけるキリスト教の拡大と軌を一にしているようにも感じられ、

明治から大正、昭和にかけて日本のキリスト教は大学生や高校生に支えられてきたのではないかとまで思えてくる。條が受洗した「京都バプテスト教会」にもおそらく多くの学生たちが通っていたのではないか。

條がどのような経緯でキリスト教と出会い、「京都バプテスト教会」の会員となったのか、詳しい事情は分からないが、信仰生活に入ったことが、西南学院との出会いをもたらしたことだけは確かである。



30歳頃の條猪之彦

（画像提供：京都化学々士会『会報』第5号）

4. 教師時代

(1) 中学教師①—秋田県立本荘中学校（現秋田県立本荘高等学校）

「秋田県立本荘中学校」は1902（明治35）年、秋田県の南部に位置する本荘町（現由利本荘市）に、秋田県で4番目の中学校として設立された学校である。

「略年表」によると、條は、1910（明治43）年7月13日に「京都帝国大学理工科大学純正化学科」を卒業、同年11月12日に、無試験検定により師範学校中学校物理および化学科、高等女学校理科（物理化学）の教員免許を得たのち、同16日に「秋田県立本荘中学校」の「教諭心得」となり、同30日に「教諭」となっている。また、略年表によれば翌1911（明治44）年1月18日には舎監にも就任している。

当時の教員検定は、文検による試験検定の他、無試験検定制度もあり、「指定学校」

として帝国大学・高等学校・実業専門学校などの官立高等教育機関卒業者や、「許可学校」として文部大臣の許可を得た公私立学校卒業者に、中等教員免許が与えられていた。條も帝国大学の出身であり、この制度によって免許を交付されたものであろう。條はこの学校で2年間を過ごすことになる。

條がなぜ出身地である九州から遠く離れた秋田県の中学に職を求めたのかについては不明である。また、わずか2年間で同校を離れることになった経緯についても不明である。同校に何か資料が残されていないか、問い合わせてみたが、ほとんど何も残されていないようであった。ただ、同校事務室によれば、同校の記録の中に、1912（明治45）年1月10日に行われた「通俗講演会」に講師として出席したというのが残されている、ということであった。また、同校の同窓会名簿（2017年発行）では、條の在職期間が1911（明治44）年11月から1912（明治45）年3月までのわずか5か月ということになっているということであったが、これは明らかな間違いであろう。不明なことが多い秋田時代ではあるが、2年足らずの歳月ののち、條は郷里熊本に帰ることになる。

(2) 化学研究への取り組み

時期的には本荘中学校在職中に書かれたものであるが、驚いたことに、條の研究論文がネット上に残されていたのである。教えてくれたのは、筆者の職場の同僚である藤原静郎教諭であり、同教諭がネット上から見つけ出してくれたのが、「チオ硫酸カリウムの水化物、其溶解度及び其轉移温度に就て」と題された化学研究論文であった。掲載されたのは1912（明治45）年発行の『東京化学會誌』第三三巻七号であり、発行元の「東京化学會」は、現在、国内最大の化学系学術組織「日本化学会」の前身である。ということは、化学の世界では権威ある雑誌であろう。京都帝大卒業後2年目、本荘中学在職中の1912（明治45）年の発行ということから言えば、卒業論文か、あるいはそれをもとにして本荘中学在職中にまとめられたものかもしれない。いずれにしても全国組織の学会誌に掲載されるほどのものである以上、ある程度の水準に達したものであったのだろう。

その「緒言」には、「チオ硫酸ナトリウムに就ては従来諸種の点よりの研究頗る多しと雖も之れに相当するカリウム塩なるチオ硫酸カリウムに至りては其研究頗る僅少にして其水化物の知られたるもの次の如し（化学式の羅列—中略）而かも此等の水化物の存在し得る諸条件に至りては未だ確然たる決定を見ざるなり本研究の目的は種々の温度に於けるチオ硫酸カリウムと其結晶水間の平衡を研究して前掲の水化物の組成を確定し同時に其溶解度を測定して此等水化物間の轉移温度を決定するにあり」（旧字

は新字に改めた)と書かれているが、筆者にはよく分からないので、やはり筆者の同僚で化学を専門とされる横谷聡教諭にお尋ねしたところ、要するに、研究の少ない「チオ硫酸カリウム」について、その含まれる水の割合を温度との関係から検証したものであるらしい。そもそも「チオ硫酸カリウム」とは、化学の実験の際に使われる還元剤のひとつで、同じような働きをするものに「チオ硫酸ナトリウム」があり、こちらは研究論文も多く、より一般的であるが、「チオ硫酸カリウム」の方は、條も書いていた通り論文も少なく、そのために條の論文は、現在でも度々引用されることがあるということであった。

また、その末尾には「本研究は大幸教授の懇篤なる指導の下に成りたり謹みて茲に謝意を表す」と書かれており、前述の通り、大幸勇吉(注14参照)の指導を受けていたことが確認される。條もあるいは研究者の道も志していたのかもしれないと思われる資料である。

(3) 中学教師②—熊本県立玉名中学校(現熊本県立玉名高等学校)

「略年表」に詳しい記載は無いが、「官報」第八六五〇号の記事によれば、條は1912(明治45)年3月31日付で「熊本県立玉名中学校」の「教諭」に就任している¹⁵。

玉名中学校は、1903(明治36)年、條の母校である「熊本県立熊本中学校」の「分校」として開校、3年後の1906(明治39)年に「熊本県立玉名中学校」として独立した学校である。

條が赴任したのは、独立からそれほど間もない、いわば草創期の頃であり、学校が安定するまでの間の様々な苦労があった時期であると思われる。

『西南学院七十年史』上巻の275頁『「私立西南学院」の設立認可と初代理事長の就任』の項には次のように書かれている。

「当時玉名中学校では同盟休校騒ぎがあり、校長は辞任、同校の教頭であった條は、校長代理として難問題の解決にあたった。ちょうどその時、條は学院の院長に選ばれたのである。それで、学院の開校準備の会合にも出席せねばならず、過重な仕事に心身を消耗し、健康を害した。やがて、玉名中学校の後任校長も決まり、條院長は、単身福岡に赴任、福岡市通町に居を定め、創立業務に専念することになった。」(傍線

15 『玉名高校創立八〇周年記念同窓会名簿』(玉名高校同窓会、昭和58年11月発行)にも、條の在籍期間として「明治45年3月～大正4年12月」と記されている旨、同窓会事務局で確認していただいた。また、『西南学院百年史』では「教諭」と改められたが、『西南学院七十年史』をはじめとする学院の資料では、條の身分は「教頭」となっている。ただ、後述するように、條の身分や役職については確認できていない。

筆者)

「同盟休校」や「校長の辞任」などは大問題である。條が院長に選ばれたのは、後述するように1915(大正4)年5月頃のことである。「ちょうどその時」が、この頃とすれば、この年の春頃、あるいはその前後かもしれないが、いずれにしても「1915(大正4)年」頃にこれらの「大問題」が起こったことになる。そして、條が「校長代理として難問題の解決にあっていた」のならば、当時の記録に條の働きも残されているかもしれない。そこで筆者は出張の折に熊本市立図書館を訪ね、『玉名高校七十年史』(熊本県立玉名高校 昭和48年10月1日発行)で確認することにした¹⁶。

ところが、『玉名高校七十年史』には、そのようなことに関する記述は一切残されていないのである。それどころか、大正4年から昭和8年までは「順風満帆」(同七十年史)の時代ということになっているのである。「校長の辞任」については、1913(大正2)年、初代の甲野吉蔵校長に代わり第二代の沼田博雄校長が就任しているが、沼田校長は1920(大正10)年までその職にあったことになっている。つまり「1915(大正4)年」ごろには、「校長の辞任」などはありえないのである。これは一体どういうことであろうか。そこで改めて玉名高校に問い合わせると、図書館に若干の資料が残っているということで期待したが、図書館の司書氏によると、やはり大正時代の記録はほとんど残されていないということであった。ただ、大正3年および4年の卒業写真が残されており、そこには、肩書きのない「條先生」として紹介されており、「教頭」は、別に存在するということがあった。したがって、『西南学院七十年史』に書かれたように、條が「教頭」や「校長代理」を務めていたかどうかについては、現在のところ確認ができない状態である。また、それ以上の資料が無いので、條がどのような教師生活を送っていたのかについても確認はできていない¹⁷。

ただ、本荘中学にしろ、玉名中学にしろ、創立10年未満の学校でのさまざまな体験は、西南学院の創立の際にも何らかの形で活かされたのではないと思われる。

16 玉名高校編纂の学校史には『玉名高校七十年史』のほか、同百年史(2007年4月発行)も存在するが、内容は、七十年史以降の歴史を加筆したものであり、それ以前の叙述内容は同じである。

17 「西南学院」が県知事の認可を受けたのは1916(大正5)年2月15日のことであるが、その2日前、2月13日付の「九州日報」に「西南学院開設」と題して「西南学院」の開校に関する記事が掲載されている。そこには「…同院の特色は教育勅語の主旨を奉戴し、基督教主義に依りて中学程度の教育を施し…院長は京大理学士條猪之彦氏不日赴任の筈にて氏は是迄熊本縣立玉名中學校教頭を奉職せし人なり」(傍線筆者)と書かれており、当時、すでにそのような「誤解」が生じていたのかもしれない。だとすれば、『西南学院七十年史』もそのような「誤解」を踏襲したのであろう。

5. 西南学院時代

(1) 西南学院院長就任—斉藤惣一による推薦

玉名中学校在職中の條に対して、新たに開設される西南学院の院長就任の要請はいつ頃あったのか。

『西南学院七十年史』(上巻)によれば、1915(大正4)年1月6日、C.K.ドージャーが、ミッションボード(米国南部バプテスト連盟外国伝道局)書記のT.B.レイから、男子中学校開設を承認するとの正式書簡を受け取った後、学院創立のためのいくつかの会議が開かれたようであるが、校長については、5月6日に佐世保で開かれた在日宣教師会議で、「委員会は、調査の後、玉名の中学校の教頭である條猪之彦氏を福岡における男子中学校の校長に推薦する。」ことになったということである。(傍線筆者)

続いて、『七十年史』には、「7月3日、C.K.ドージャーは、新たに選ばれた校長條猪之彦と相談した」と記されている。ということは、おそらくこの1月から5月までの間に院長就任の打診があり、7月に最初の正式な会合があったのであろう¹⁸。

そして、この院長就任に深く関わったのが斉藤惣一(1886-1960)である。

院長決定の経緯について斉藤惣一は『西南学院創立三十五周年記念誌』(1951)の中で「創立当時の思い出」として次のように述べている。

「…私が熊本の五高の教師であった頃、ほとんど毎月のように、西南学院創立の委員会に出席した。或る時は福岡、ある時は長崎、といった具合に、よく夜行で熊本に帰った記憶がある。…いよいよ開校の運びとなった。しかし、どうしても適当な日本人の校長が見つからぬ。そこで最初に私に就任をということになった。…その頃、私に極めて親しい間柄であったクラーク先生、特にその夫人が女学校設立に熱心で、私にぜひ、骨を折れというご希望があり、また一方、私の父と親しい寺内正毅大將が総理大臣となり、その秘書官にという話もあり、他方、数年に亘って熱心に私の学生時代から指導して下さった、YMCAのゲーレン・エム・フィッシャー氏が、私にYMCAの主事になれという勧めがあった。私は相当迷ったが、遂に意を決して上京、YMCAの仕事に献身することとなった。そこで、西南学院の方には、條理学士をお願いすることとなった。」(本文は『西南学院創立三十五周年記念誌』、4頁)¹⁹

斉藤惣一は、現在の北九州市門司区に生まれ、豊津中学校(現在の育徳館高校)から第五高等学校(現在の熊本大学)を経て東京帝国大学文学部英文科に進み、卒業後

18 『西南学院七十年史』上巻、261～263頁

は母校である五高の教授となった。中学生時代に下関の^{バプテスト}下関浸礼教会で洗礼を受け、高校ではYMCA（前述の通り、五高では「花陵会」と称する）に入会していた齊藤は、東大での学生時代、さらに教師となってからも熱心にクリスチャンとしての活動を続けた。西南学院の創立者C.K.ドージャーとの交流が生まれたのは、後述するが、おそらく大学生の頃だと思われる。その後、五高の教授となった齊藤は、「理事」として学院の創立に深く関わることとなり、学院の初代院長を委嘱されることとなったのである。しかしこの時、齊藤の「思い出」の中に書かれていたとおり、齊藤には西南学院院長のほか、YMCA 同盟主事への就任も要請されており、悩んだ末に齊藤は、YMCA 同盟主事を選ぶことになるわけだが、その時に自分の代わりに推薦したのが、五高では5年上級の先輩にあたる條猪之彦であった。

齊藤は西南学院創立の翌年の1917年、五高の教授を辞してYMCA 同盟主事に就任、その後、総主事となり、関東大震災後の復興や太平洋戦争前後の国際関係の改善に尽力、戦後は引揚援護庁初代長官や国際基督教大学建設実行委員長などを務めた。

ちなみに西南学院高校では、齊藤と関係の深いYMCA 東山荘で40年以上にわたって「林間学校」が続けられているが、それも西南学院と齊藤惣一、そしてYMCAとの不思議な縁を感じさせるものである。

(2) 齊藤惣一とC.K.ドージャーとの出会い

それでは條を院長に推薦した齊藤とC.K.ドージャーとはどこで出会ったのか。『日本バプテスト連盟史（一八八九～一九五九年）』（日本バプテスト連盟、1959年発行）および『西南学院七十年史』の記事を総合すると、二人の出会いは齊藤がまだ大学生であった1909（明治42）年のことであったと思われる。

1909年の5月に東京で開かれた南北バプテスト合同による「日本浸礼（派）教会」第10回総会の、下関教会からの代議員としてドージャーと齊藤の二人の名前が列記されているのである²⁰。

齊藤はこの時、東京帝大の1年生であったが、受洗した下関教会の東京在住の関係

19 文中、「クラーク先生」とは、「熊本バプテスト教会」の宣教師であった「W.H.クラーク」のこと。クラーク夫人が設立を望んだ「女学校」は、クラーク夫妻が望んだ熊本ではなく、小倉に「西南女学院」として創立される。また、「寺内正毅大将が総理大臣となり」とあるが、寺内正毅陸軍大将の総理大臣就任は、西南学院創立の翌年、1916（大正5）年10月のことであり、話が合わない。齊藤惣一のYMCA 主事への就任は1917（大正6）年のことであり、おそらく記憶の混同が生じたのであろう。なお、齊藤惣一の父、「勇熊」は長州藩出身の陸軍の軍人であったが、惣一が14歳の時に病気で亡くなっており、そのために齊藤は、学業を一時中断することになる。

者(?)として、数少ない「西南部会」の出席者に選ばれたものと思われる²¹。

ドージャーの方は、ここに斉藤との不思議な縁を感じさせるものがあるのだが、ドージャーが宣教師として下関教会に赴任したのはその前年の1908年のことである。もともと下関教会は、というか、山口県は「北部バプテスト連盟」の伝道区域であったが、1908年に開かれた「日本浸礼(派)教会」第9回総会において、「南部バプテスト連盟」(西南部会)の伝道区域に移管されることになったため、「11月にC.K.ドージャー師が佐世保から下関に一時駐在することに」になったということである(傍線筆者、『日本バプテスト連盟史(一八八九～一九五九年)』112～113頁)。その「一時駐在」の時に斉藤との出会いがあったわけである。(注20)で示したとおり、斉藤は、五高時代には「熊本バプテスト教会」に所属して活動しており、斉藤の「創立当時の思い出」に書かれていたように、斉藤と同教会の宣教師、W.H.クラークとは「極めて親しい間柄であった」。とすれば、当然、クラークからドージャーに対し、斉藤に関して、何らかの連絡はあっては違はなく、そういったさまざまなつながりが二人を結びつけたのだと思われるのである。

伝道区域の移管、ドージャーの一時的駐在、斉藤の東京在住、斉藤とクラークの縁、さらに言えば、斉藤が下関教会で受洗したのは、父の死による経済的事情から中学を休学し、下関で生活していた時のことであり、これらのいくつもの偶然が重なり合って、ドージャーと斉藤との出会いがもたらされたとと言えるのである。別の言い方をすれば、いくつもの不思議な偶然が重なって一つの大きな出会いがもたらされ、その結果、條の院長就任が実現したとも言えるのである。

ちなみに、斉藤とドージャーとが出席した1909年の第10回総会における主要な議題が、北部バプテスト系の「横浜バプテスト神学校」と南部バプテスト系の「福岡バプテスト神学校」の合併問題、すなわち「日本バプテスト神学校」の設立とそれに伴う「福岡バプテスト神学校」の閉鎖に関することであった。結果は圧倒的多数で合併

20 『西南学院七十年史』上巻、194頁、『日本バプテスト連盟史(一八九九～一九五九)』114頁。また、「日本浸礼(派)教会」については、『西南学院七十年史』および『日本バプテスト連盟史』で表記が統一されておらず、とりあえず括弧で示した。また、表記が統一されていないことについては、教会名についても言えることで、「下関教会」も「下関浸礼教会」あるいは「下関バプテスト教会」とも表記されている。その他の教会についても同様で、参照資料中、最も多く使用されていると思われる呼称を基本的に使用した。

21 『斉藤惣一とYMCA』(海老沢義道著、1965年、斉藤伝記念出版委員会)によれば、斉藤の五高時代の「所属教会」は「熊本バプテスト教会」と記されており、五高の教師となった後も「熊本バプテスト教会」で活動していたようだ。斉藤の事蹟に関しては、同書によるところが大きい。

案が可決され、福岡の地から神学校が移転することとなった。

ところが、これに納得できなかった南部系の「西南部会」の人々によって1911(明治44)年に新たに作られたのが、「福岡バプテスト夜学校」であり、これが「1916年の西南学院誕生に繋がっていく」(『西南学院百年史』通史編総論第1章第4節「西南学院の源流1」27頁)ということになるのだから歴史はおもしろいのである。

そういう意味では、「福岡バプテスト神学校」の閉鎖を決めた、この第10回総会こそが、ドージャーと斉藤という二人の出会いを演出しながら西南学院創立のきっかけを作ったと言えなくもないのである。

(3) 斉藤惣一と條猪之彦との出会い

斉藤惣一とドージャーとの出会いの場は、「下関教会」を中心とするものであった。では、斉藤惣一と條猪之彦は、どこで出会ったのか。『西南学院七十年史』には、「條もまた、バプテストの会員であったと考えられる。」(傍線筆者)と書かれているだけで、詳しいことは何も書かれていない²²。

斉藤と條との接点については、いくつかの可能性が考えられる。旧制高校は同じ五高であり、大学も東京帝大ということであれば共通する。また、條が京都帝大に進学した後も、YMCAなどの活動を通して、あるいは交流があったかもしれない。

ただ、條と斉藤とは5歳違いであり、五高、東京帝大と学校は同じでも在学期間は重ならない。従ってこれらの学校での接点は考えにくい²³。ならばYMCAの方はどうか。筆者は、前述の、旧制五高以来の伝統を有する熊本大学のYMCA組織「花陵会」や旧制三高および京都帝大以来の伝統を有する京都大学のYMCA組織「地塩会」などに連絡を取ってみたが、やはり詳しいことは分からなかった²⁴。

條と斉藤の接点はどこか。考えあぐねたまま訪ねたのが「五高記念館」であった。

22 『西南学院七十年史』上巻、268頁。

23 條と斉藤とは、條が5歳年上であるが、就学年齢の違いなどがあって、五高、東京帝大の入学は、それぞれ4年の違いになっている。いずれにしても在学期間は重ならない。

24 熊本大学の「花陵会」および京都大学の「地塩会」は、いずれも歴史的な価値を持つ会館と学生寮を有しながら学生諸君によって運営されているが、筆者の突然の問い合わせに対しても、快く対応していただいた。さらに京都大学の「地塩会」からは、同会発行の書籍、小冊子などを送っていただいた。特にその中の『地塩浴水—京都大学YMCA百年史』には、明治から大正、昭和にかけての三高・京大YMCAの活動が興味深く記されているが、残念ながら條に関する記述はなかった。同書にも記されていたことであるが、当時はYMCAに所属していない学生信徒も多数いたようで、條もそんな一人であったようだ。

そこで前述の研究員の藤本氏と歓談中、同氏から示唆を受けたのが、二人がいずれも教師として働くこととなった熊本のことである。出身校やYMCAが接点でないとなれば、ともに働きの場を与えられた熊本の地、あるいは熊本の教会しかないのではないか、と仰るのである。実際考えてみると、斉藤が大学を卒業し、五高の教師（講師）となるのが、1911（明治44）年のこと、條が玉名中学の教師となるのが、1912（明治45）年のことであり、時間的には熊本が、熊本の教会が二人の接点となった可能性は高い。そして二人ともバプテストの会員ということであれば、斉藤とは関係の深い「熊本バプテスト教会」が、二人を結びつけた可能性が高いということになる。

「熊本バプテスト（浸礼）教会」は、九州では、門司（1893〈明治26〉年）福岡（1901〈明治34〉年）に続き、3番目（1902〈明治35〉年）に教会が組織され、1905（明治38）年には、日本における南部バプテスト最初の新教会堂を建設したという歴史と伝統を有する教会である。教会組織以前から熊本で伝道活動を行い、同教会の基礎を築いた宣教師、W.H.クラークは、ドージャーとともに、後に「西南学院」として結実する男子中学校の設立を提唱した人であり、その夫人ルシルは、後に「西南女学院」として結実する女学校の設立を中心となって提唱した人であった。また、すでに紹介したように、五高の学生時代から、クラークの薫陶を受けたのが斉藤惣一であった。そういう意味でも、西南とは非常に深い関係にある教会だと言える。筆者はさっそく「熊本バプテスト教会」に連絡を取ることにした。

ところがー

「熊本バプテスト教会」が「無い」のである。ネットで検索しても、電話番号案内に照会しても、出てこない。クリスチャンの先輩教師や同僚教師に尋ねても、はっきりしたことは分からない。そこで、何か手がかりがつかめるかもしれないと思い、名前は違うが、熊本市内の2つのバプテスト系の教会に連絡を取ってみることにした。2つの教会とは、「熊本愛泉教会」と「東熊本バプテスト教会」である。

「熊本愛泉教会」では、濱田修三牧師が丁寧に応対してくださった。事情を話してお尋ねしたところ、何と、その「熊本愛泉教会」こそが、「熊本バプテスト教会」の後身だったのである。いや、正確に言うと、後身の一つ、と言うべきかもしれない。その後、濱田師から送っていただいた「資料」によれば「熊本バプテスト教会」は、1960（昭和35）年、その水前寺伝道所に「株分け」して一部の教会員が移動、翌年誕生したのが「東熊本バプテスト教会」であり、残った本体も1963（昭和38）年、「熊本新生教会」と改称、さらに1973（昭和48）年、その前年に誕生したばかりの「愛泉教会」と合併し、「熊本愛泉教会」となった。さらに、熊本市の中心部、南坪井町（現中央区南坪井町）にあった由緒ある教会も、1978（昭和53）年、郊外の谷尾崎町（現西区谷

尾崎町) に新会堂を新築して移転し、現在に至るまで活動を続けているということであった。



熊本バプテスト教会 (年代は不詳だが、竣工当時の写真と思われる)

條の教籍が確認できる名簿などが残されていないか、期待をしたが、濱田師によれば、古い資料などは残されておらず、残念ながら昔のことは分からないということであった。ただ、何かの参考になれば、ということで送っていただくことになったのが前記の「資料」、すなわち「熊本バプテスト教会」・「熊本新生教会」・「熊本愛泉教会」の宣教百年記念誌『神は愛なり』(日本バプテスト熊本愛泉教会 2002)であった。同書が届くまでの間、念のために「東熊本バプテスト教会」にも連絡を取ってみたが、やはり古い資料は残されていないとのことであった。

その後届いた同書には日本におけるバプテスト草創期のことを知る上で貴重なことが多く記されており、前述の『日本バプテスト連盟史(一八九九～一九五九年)』の内容を補完する部分もあって、興味深く拝見させていただいた。実は、クラーク宣教師夫婦のことをはじめ、「熊本バプテスト教会」に関する本項の記述も、同書によるところが大きいのである。

ところで―

同書の中の大正時代の記述を眺めていたときのことである。突然、「條猪之彦」の名前が筆者の目に飛び込んできた。まさしく、何の前触れもなく、目の前に現われたのである。濱田師からは、條に関することは分からない、と連絡を受けており、全く期

待をしていなかったのが驚いた。そこにはこう書かれていた。

「また 1916 年（大正 5 年）2 月には、熊本教会出身の條猪之彦氏が、西南学院の初代院長となられた。ただし体調がすぐれず、同年 7 月には院長を退かれた。」（同書 33 頁）

おそらく、これが條と熊本バプテスト教会との関係を示す唯一のものではないだろうか。教籍記録など原資料が残されていないのが残念であるが、熊本バプテスト教会の歴史の中に、條のことが刻まれていたことは間違いなさそうである。條と齊藤はやはり「熊本バプテスト教会で出会っていた」のであった。いずれにしても、これでドージャーと齊藤、そして條との関係が明らかになったわけである。

（4）西南学院院長としての働き

1915（大正 4）年 12 月 13 日発行の「官報」第一〇一〇号に「熊本県立玉名中学校教諭」（傍線筆者）であった條の、依願免職（12 月 11 日付）の記事が掲載されている。新年度からの西南学院の創立に備えて、早めに退職したのであろう。ただ、條の院長としての在職期間については、「略年表」や、前項の『神は愛なり』では、院長への就任が 1916（大正 5）年 2 月、辞任は同 7 月 1 日となっているが、『西南学院七十年史・下巻』所載の「退職者一覧表」では、1916（大正 5）年 4 月から 11 月までということになっており、その他の資料を含めて学院の記述は一定していない。正式の院長就任は 4 月であろうが、実際はその前後に準備期間などがあったために多少の混乱が生じたのであろうと思われる。いずれにしても、その在職期間は 6～7 か月という短いものであった。

條の院長としての働きについては、おそらくドージャーが書いた一文「西南学院 15 周年記念に寄せて」（『日本の C.K.ドージャー・西南の創立者』56～59 頁）が最も詳しいものだと思う²⁵。

「…校長の給与の月 100 円を除けば、一番高い先生の給与は月 60 円でした。…（中略）…私たちは選ばれた校長といっしょに、福岡県に学校開設を申請しながら、教員の採用にかかりました。條氏は教員採用を一番心配しておられました。

25 『日本の C.K.ドージャー・西南の創立者』（原題 *Charles Kelsey Dozier of Japan: A Builder of Schools*、モード・アデリア・ドージャー著、瀬戸毅義訳、2002）は、ドージャー夫人による C.K.ドージャーの伝記で、表題作の他、「追補」として、「西南学院 15 周年記念に寄せて」の一文が収録されている。（翻訳および出版者の瀬戸毅義氏は、元西南学院中学校、高等学校の聖書科教諭）

福岡県への学校開設の申請に関して、当時福岡バプテスト夜間学校で教えておられた川勝教授（筆者注「教諭」のことか？原著では“Prof. T. Kawakatsu”）が貴重な働きをしました。また、修猷館の学生部長（筆者注「校長」のことか？原著では“The dean of Shuyukan”）が折りにかなった助言をくださり大きな恵みでした。

ところが、1916年1月、選任されたばかりの條氏が病気で、3ヶ月入院すればまた校長としての責務を果たし得るという確信があるので、医者が津屋崎にある病院への入院を勧めているとの報告を受けました。教員について相談するために、川勝教授と私は幾度も津屋崎に條氏を訪ねました。市と県の関係者のために解決しなければならない多くの問題が浮上してきました。

1916年2月15日、福岡県知事から西南学院設立の認可が下りました。とかくする中に、條校長の助けを得ながら9人の教師を選任し、西南学院を4月に開校する準備が整いました。その当時から本校におられる先生は、今となっては古澤教授お一人です。

105人（筆者注：入学許可は105人だが、実際の入学者は104人）の入学が認められ、4月11日、西南学院の開校式を行いました。條校長も開校式に出席することができて、全てがスムーズに進みました。（中略）

しかし、病が襲ってくるのも物事の常であります。この生まれたての赤ん坊には、慎重な保育を要したのですが、條校長のご健康は、回復する代わりに悪化するという衝撃が待っていました。春の学期期間中、條校長が学校におられたのはたった3回でした。7月にはご退職になり、学校管理の経験がまったく無い私から去っていかれました。

創立委員会は直ぐに、條校長の後任に相応しい人を探し始めました。委員会は東京帝大卒の4人の方に話を進めました。（中略）

1917年2月、適切な日本人の校長を見つけるという試みが何度も失敗し、私が校長に選ばれ、1929年7月まで校長を務めたのでございます。（以下略）」（傍線筆者）²⁶

給与をはじめとして條の西南学院創立に際しての働きがうかがわれる内容である。その給与については、おそらく玉名中学赴任の際のものと思われるが、1911（明治45）年4月23日発行の「官報」第八六五〇号に「九級俸下賜 但当年俸八百四拾円下賜」と書かれている。「八百四拾円」は月給に換算すれば70円ということになるが、「当分」という表現からすれば「九級俸」はもう少し高給だったと思われるので、給

与面では公立学校当時と同等以上のものを得ていたのであろう。

肝心の院長としての働きは、條が「一番心配して」いたのが「教員採用」であり、また、そのことが、「学校管理の経験がまったく無い」ドージャーにとって、「日本人の校長」を必要とした大きな理由の一つだったのではないか。「修猷館の学生部長」も創立に際し、助言を与えていたというのも興味深いことである。

創立後の勤務状況については、「條校長が学校におられたのはたった3回でした」ということばに象徴的に表現されている。誕生したばかりの学校のこと、自らの病気のこと、條の心中を考えると、おそらく平静ではいられなかったにちがいない。責任を感じつつもその責任を果たすことのできないもどかしさは、いっそう條の心を傷つけただろう。前述の通り、結局、一年も持たずに條は西南を去ることになるのである。

6. その後の生活について

その後の條の生活については、これまで全く明らかにされておらず、どのような経過をたどってその生涯を終えたのかについても、全く分かっていなかった。ところが、條の学生時代のことについて調べていた時にもたらされたのが、「生立から」と題された次の文章である。

きっかけは、京都帝大時代の條についての資料が何か残されていないかどうかを確認するために、京都大学理学部の化学事務室に連絡を取ったことだった。応対していただいた同事務室を通じて同図書室の國府笑子氏から送られてきたのが、その文章だったのである。その文章が掲載されていたのは、「京都化学々士会」の『会報 第五

26 文中、「川勝教授」については、『日本のC.K.ドージャー・西南の創立者』には、「(注4)」として「英語を教えた川勝虎雄のことだと思われる(在任1916~1931)」と書かれているが、『西南学院七十年史』下巻所収の「退職者一覧表」には、「退職年月日」は、「1920(大正9)年5月」となっている。また、この文章が書かれた時点(1931年当時)で、「その当時から本校におられる先生は古澤教授お一人です。」とあるが、同一覧表で確認できる限りでは、創立当時の教員数は、ドージャーを除き12人であったが、そのうち1916年度中に退職した者は、條を含めて4人、17年度に1人、18年度に3人、19年度に1人、20年度に2人と第一回生の卒業を待たずに、「古澤教授」以外の11人が退職している。生徒の方も「105人」と書かれているが、実際に入学手続きをしたのは「104人」であり、その104人のうち、卒業したのはわずか29人である。教員のみならず生徒の退(転)学も多く、こんなところにも草創期の学校の厳しさがうかがえる。なお、同一覧表によれば、「古澤教授」とは、「古澤正雄」のことで、国語と修身の担当で、1934(昭和9)年3月まで在職した。

また、條の病気については、ドージャーは本文中では、「ill」(病気)としか表現していないが、ドージャー夫人による伝記の中では“tuberculosis”(結核)と書かれている。

号』（大正9年1月発行）である。「京都化学々士会」とは要するに「京都帝国大学理工科大学化学科」の同窓会組織であり、その同窓会報がすなわち『会報』なのであった。國府氏は筆者からお伝えした條に関する情報を基に同窓書室に残された資料の中から條の文章が掲載された『会報 第五号』を探し出してくださったのである。條の辞任後の様子を伝えるものとしては、おそらく唯一のものではないか。いずれにしても貴重なものなので全文を掲載する。

生立から

條猪之彦氏

拝復 会報第五号に小生等の写真及略歴を御記載になりますとか、写真はこの頃ちつとも写しませんからずつと古いのを一葉御送附申上げます、又履歴については申上げる程のものはありませんがだまって居ては幹事さんがご迷惑と存じ左に御披露を致します。

生まれたのはその昔熊襲に住んだと云う肥後の国の真ん中です。それから高等学校までは郷里で済まし大学を出たのは何でも（明治）四十三年だつたと思ひます、出ると直ぐに中学校の先生になりました、それから終には福岡市で私立中学校の校長をして居ました、それから病気に罹つて爾来、方々の病院に入院をしたり転地をしたりして殆ど社会と没交渉に日を送る事茲に五年です、只今は天草に転地して専ら静養に務めて居ります、何れ其うち天国へ転籍するつもりで居りますがそしたら好きな果樹園でもひらき尚暇があつたら化学の研究所でも設立しようかと思つて居ます其時には諸君にもご助力を願う事に致しましょう。

小生の履歴過去、現在、未来に涉つてざつと斯くの通りであります。（傍線筆者、旧字、旧仮名遣いを新字、新仮名遣いに改めた以外は原文のまま）

院長辞任後の條は、この文章が書かれた1920（大正9）年の時点まで「方々の病院に入院をしたり転地をしたりして」5年の歳月を過ごしたというのである。全文を通して明るい調子で書かれているが、当時において転地療養を必要とするほどの病気（結核一注26参照）であれば、完治する見込も少なく、それが「何れ其うち天国へ転籍するつもりで居ります」という死を覚悟しているような表現を生み出したのであろう。実際、その数年後に條は「天国へ転籍する」ことになるのである。

條の「略年表」によれば、院長辞任の記事に続き、「1927（昭和2）8月30日 熊本県八代市（？）において逝去する。（46歳）」と書かれているが、この記述が何に基づくものであるかは分からない。逝去の場所とされている「熊本県八代市（？）」についても、果たしてそれが本当のことなのかどうかも分からない。八代とすれば、転地？

療養先かもしれないし、もしかすると、八代は、自宅のあった熊本市の南部、杉島の間違いかもしれない。條の最後に関して、分からないことばかりであるのは非常に残念であるが、今後の調査、研究に委ねたいと思う。いずれにしても、條は46歳という若さで天国へ旅立ったのであった。

7. さいごに — 「院長」と「校長（中学部長）」について

筆者はこれまで「西南学院初代院長條猪之彦」について、その生涯をたどってきたわけであるが、最後に考えておきたいのは「院長」という名称の意味とその働きについてである。というのも、我々は條のことを「初代院長」として記憶し、現院長まで続く17人の「院長」の系譜の中で理解をしている。またその考えは、『西南学院七十年史』あるいは『西南学院百年史』の中でも踏襲されて現在に至っている。

しかし、考えてみると、創立当時の「院長」とその後高等学部などが設立されてからの「院長」とでは、同じ「院長」でも、その内容は大きく異なったものである。すなわち、創立当時の「院長」は、「私立中学西南学院」（その後「中学西南学院」）の「院長」、つまり実質的には、條も自らをそう称していたように「私立中学校の校長」である。そして高等学部開設後の「院長」は複数の学校を束ねる、現在と同じ意味での「院長」ということになるわけである。

ではドージャーなどは、この名称についてどう認識していたか。先に引用した「西南学院15周年記念に寄せて」の中では、條のことを“Principal Jo”、條に続いて「院長」となった自分のことも“Principal”と記している。また、この手記が収められた「日本のC.K.ドージャー・西南の創立者」の著者であるドージャー夫人は、條が「院長」に選ばれる際の条件を“a man of strong Christian character to serve as principal”（「院長」として働く信仰の強いクリスチャン）と表現し、高等学部の職員室でのドージャーのことも、やはり“the principal”（こちらの翻訳では「校長」）と表現しているが、西南を去る際のドージャーのことは“president of Seinan Gakuin”と表現している。

1921（大正10）年、高等学部の開設に合わせて、新たに財団法人「私立西南学院財団」が設立され、それまでの「中学 西南学院」という名称も「西南学院中学部」と改められ、初代「中学部長」には竹本仲蔵が就任する。『西南学院百年史』資料編61頁に掲載されている *Annual of the Southern Baptist Convention, Sixty-Sixth Session-Seventy-Sixth Year, 1921*（南部バプテスト66-76年次報告）と題された一文の中では、「中学部長」のことは“dean of the middle school departmet”と表現されている。“dean”は、

ドージャーの一文の中で「修猷館の学生部長（校長？）」と訳された部分で用いられていたことばである。

これらのことから考えると、やはり一口に「院長」と言っても、我々は、そう区別せずに使っているが、英語では微妙に違うようである。前述の通り、翻訳者の瀬戸氏も苦労されたのか、“Principal”の訳語として「院長」と「校長」という二つの言葉を充てられている。あるいは、これは、條が短期間で「院長」を辞任してしまったために、生じた問題なのかもしれない。

ここからは全く仮定の話であるが、條がそのまま「院長」を続けることができていたならば、どうなっていただろうか。5年後に高等学部が開設された際に、そのまま中学と高等学部を束ねる「院長」となっていただろうか。筆者はおそらくそうになっていただろうと考えている。というのも、前に引用したドージャーの一文「西南学院15周年記念に寄せて」の中で、創立委員会は、「條校長の後任に相応しい人」として「東京帝大卒の4人」に話を進めたと書かれており、「院長」に「相応しい人」として「帝大」出身者を想定していることから考えても、おそらく創立委員会も高等学部などの開設をはじめとした将来の発展を考えており、そのためにも「帝大卒」の人物を招聘しようとしたのではないかと考えられるからである。また、結果的にドージャーが継続して「院長」を続けることになったことから考えても、條に対しても当然そのような大役が与えられていたのではないだろうか。

條が「院長」を続けていれば、その後の西南の発展の上でも、特にその理科系の方面において、何か変化がもたらされていたかもしれない。「化学科」――すなわち「理系」の出身者が「院長」であれば、当然その後の発展にもそういった意味での大きな影響は出てくるだろう。言うまでもなく西南は「文系」の学園であるが、條がそのまま在職していれば、その後の高等学部（専門学校）や戦後の大学の開設に際し、「理系」方面への発展も考えられていたかもしれない。そう考えると、條の退任はその後の西南の運命を決する大きな出来事だったとも言えるのである。

※本文は、文中に示したとおりたくさんの方々のご協力によって出来上がったものであり、筆者一人の力では到底ここまでたどり着くことはできなかったものであることを改めて申し上げておきたいと思います。お世話になった方々のお名前は、それぞれのお気持ちを尊重し、すべて掲げることは控えましたが、お世話になったすべての方々に対し、大きな感謝の気持ちは伝えさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

【付記】『西南学院百年史』における時代区分と歴史認識について

今回、本文の執筆、校正を通じて、改めて「西南学院」の創立前後の状況について、調査、確認作業を進めてきたわけだが、その中で気になることがあるので、この機会に一言付け加えておきたい。それは、この文の標題に掲げた『『西南学院百年史』における時代区分と歴史認識について』である。

『西南学院百年史・通史編』（以下『百年史』）では、学院創立の年、すなわち1916（大正5）年「以前」を「第1章」とし、「第2章」を「創立期の西南学院」として、その時期を【1916年～1930年】で区切っている。創立年を中心に前後に分けたわけだが、第一次世界大戦（1914～1918）の途中、しかも日本も大きな影響を受け続けている中で時代を区切るというのは、どう考えても不可解である。やはりここは、第一次世界大戦の始まりであり、時代が大きく展開してゆく「1914（大正3年）」前で区切るべきであったと思う。

また、その「時代背景」についても、「第2章」では、何故か、学院創立後の1917（大正6）年の「ロシア革命」から説き起こし、「シベリア出兵」や「米騒動」、「植民地朝鮮」の「三・一独立運動」と「弾圧」、「治安維持法」の制定や「張作霖爆殺事件」など、世相の暗黒面を強調するものばかりが並べられ、学院があたかも暗い時代の中で誕生したような印象を与えている。そこで筆者は、これも時代を1916（大正5）年で区切ったことによる問題かと考え、「第1章」の「時代背景」を確認してみたところ、そこに書かれているのも、「韓国併合」や「大逆事件」、「シーメンス事件」や「山東半島のドイツ植民地占領」、中国に対する「二十一ヶ条の要求」など、やはり時代の暗黒面と負の側面を強調するものばかりである。この「暗黒面ばかりを強調する一面的な見方」が果たして本当に正しい歴史の見方と言えるだろうか。当時の社会を「素直」に眺めれば、もっと別の側面もたくさん出てくるはずである。実際、1916（大正5）年前後の様子を、当時の新聞等で確認してみると、「百年史」の記述からはとても想像できない社会のさまざまな様子が見えてくる。そもそも、不景気な暗い世相の中では、学校を設立するための寄付金なども集まるはずはなく、新しい学校など生まれるはずもないのではないか。

筆者は以前、明治末期から大正、昭和前期にかけての新聞（「福岡日々新聞」、「九州日報」等）を、時間をかけてかなり丹念に調べたことがあるが、その経験を通して言えることは、大正時代、特に第一次世界大戦の時期は、日本全体が好景気につつまれていた「大正バブル」の時期であり、特に福岡にとって「大正5年」は、やや大げさな言い方かもしれないが、そのような好景気を背景にした「空前絶後の『熱気』に満たされていた年」ということである。というのも、この年、福岡では7月に、杉山茂

丸による一大プロジェクト「博多湾大築港計画」が始動、また11月には、国家的一大行事である「陸軍特別大演習」が開催されるなど、福岡にとっては画期的な年であった。ただ、良いことばかりではなく、6月には「市政刷新会騒擾事件」や「博多毎日新聞社襲撃事件」など、多数の市民を巻き込んだ「暴動」も起きたが、それも見方を変えれば、当時の「熱気」を象徴する出来事だと言えるだろう。「西南学院」は、そのような「好景気」と「熱気」とを背景にして誕生したのであって、不景気な暗い世相を背景として誕生したのではないのである。

筆者も『百年史』の執筆者の一人として、『百年史』の刊行以来、違和感を感じていたことなので、この機会をお借りして一言付け加えさせていただいた次第である。